

2026 年 9 月 27 日 聖霊降臨後第 18 主日 特定 21 奈良基督教会聖餐式説教
マタイによる福音書 21:28-32 「やっぱり行こう！ぶどう園へ」 司祭エレナ古本みさ

9 月 21 日、第 66 回京都教区信徒の集いが、この奈良基督教会で開催されました。190 名もの参加者がありました。お料理もおいしく、皆さんの多大なご協力とご尽力によって、本当にすばらしい集いとなりました。改めて、皆さま、本当にありがとうございました。これからは私たちが、神さまからの「ラブレター」をしっかりと受け取り、そこに記された大きな愛を、「ラブソング」としてこの世界へ伝えていくことができますように。そして、この教会がいつまでもその拠点であり、アンカーであり続けることができますようにと願っています。

信徒の集いの公演では、この教会のたくさんのグループが、神さまへの「ラブソング」を披露してくださいました。すばらしかったです。でも、このラブソングの醍醐味は、歌い手がどれほど上手に歌えるかということではありません。すべての栄光を神さまにお返しし、神さまに愛されている喜びを周りの人たちに伝えること。それが何よりも大切なのです。歌でなくてもいいのです。クリスチャンとして生きること。神さまを信じること。イエスさまに従って歩むこと。それがどれほどすばらしいことであるかを、それぞれのやり方で周りの人々に伝えていく。それこそが、私たち一人ひとりの神さまへの「ラブソング」なのだと思います。

そして今日、これから、とてもうれしいことがあります。そのラブソングを耳にされたお一人の方が、イエスさまに従って生きる決心をなさり、洗礼を受けられます。これこそ、教会に与えられている大切な使命です。マタイ 28 章で、復活されたイエスは天に昇られる前に弟子たちに言われました。「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授けなさい。」そして、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」と約束されました。

今日洗礼を受けられる方は、ご主人の「神さまへのラブソング」を聞いて決心されました。そのご主人は、この教会のあるメンバーの「神さまへのラブソング」を聞いて決心されました。そして、その方もまた、別の誰かの「神さまへのラブソング」を聞いて、イエスさまと出会ったのでしょう。

「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」この約束のもとで、一人の人がまた一人の人へと福音を伝え、イエスさまの弟子が生まれていく。それが教会です。

さて、今日の福音書を見てみましょう。あるお父さんが、二人の息子に、「今日、ぶどう園へ行って働きなさい」と言います。兄は、「いやです！」とはっきり断りました。ところが、後になって考え直し、ぶどう園へ出かけていきます。弟は、「お父さん、承知しました！」と、とても気持ちのよい返事をします。ところが結局、行きませんでした。この二人のうち、どちらがお父さんの望みどおりにしたでしょうか。もちろん、最初は「いやです」と言いながらも、後になって考え直し、出かけていった方です。非常に単純明快なお話です。

イエスさまは、このたとえを、当時の宗教指導者たちに向かって語られました。彼らは、言葉では「神を信じます」「神に従います」と言っていました。しかし、洗礼者ヨハネが神から遣わされ、悔い改めを呼びかけても、その言葉を受け入れませんでした。それに対して、当時の社会で「罪人」と見なされていた徴税人や娼婦たちは、ヨハネの言葉を聞き、神さまの方へと向きを変えていったのです。そこでイエスは、非常に強烈な言葉を語られます。「徴税人や娼婦たちの方が、あなたがたより先に神の国

に入る。」もちろんこれは、「どんな生き方をしてもかまわない」という意味ではありません。大切なのは、過去にどのように生きてきたかだけではない。神さまの呼びかけを聞いたとき、自分の向きを変えることができるかどうかなのです。

兄について、聖書には、「後で考え直して出かけた」と書かれています。この「考え直す」という言葉には、ただ頭の中で考えを変更するだけではなく、「ああ、違っていた」と心を動かされ、向きを変えるという響きがあります。最初は「いやです」と言った。けれども、それで終わりではなかった。もう一度、お父さんの言葉が心に響いた。そして、「やっぱり行こう」と立ち上がったのです。私は、ここに神さまの大きな愛を見るような気がします。神さまは、私たちが最初に「いやです」と言ったからといって、「はい、もうあなたは終わりです」とはおっしゃらない。私たちに、何度でも「考え直す」時間をくださる。どんなに強く、「神などいない」「宗教など人間が造ったものだ」「聖書なんて信じられない」と思っていたとしても、それでも神さまは大きな両腕を広げて待っていてくださるのです。

この物語を読むと、私はどうしても自分の過去を思い出します。私は牧師の娘として、小さな牧師館で生まれ育ちました。家が教会であることの楽しさはたくさんありました。でも同時に、教会から離れることができません。「今日は日曜日だけど、礼拝には行かない」という選択肢がないのです。中学3年生の頃、私は「牧師館脱出計画」を企て、高校1年生で、アメリカへ留学しました。神さまにも、教会にも、「いやです」とはっきり言ったのです。アメリカで初めて、教会へ行かなくてもよい生活を経験しました。文字どおり、「自由をつかんだ!」という感覚でした。ところが、ある日、心の中にものすごい渇きを感じるようになりました。ホームシック。友達がいない寂しさ。なかなか英語が話せるようにならない焦り。そうした苦しさが、どんどん大きくなっていったのだと思います。

そんなある日、ふと思いました。「行ってみよう。」教会です。初めて行ったアメリカの聖公会の教会は大きく、知らない大人ばかりでした。牧師の説教も何一つ意味が分からず、緊張するばかりで、何も楽しくありませんでした。ところが帰り際、私の心の奥深くに、一つの言葉が響いたのです。「お帰り。」イエスさまの声でした。幼児洗礼を受け、12歳で堅信を受けていた私でした。けれども、そのとき初めて、「ああ、イエスさまは本当におられるんだ」と知ったのです。それから長い時間がたちました。ものすごく曲がりくねった道を、あっちへ行ったり、こっちへ行ったりしました。そして最終的にたどり着いたのが、最初にあれほど「いやです!」と言い切った教会でした。私たち一人ひとりに、神さまからぶどう園へと招かれ、そして遣わされる「その時」が与えられています。

先日、旅先で、とてもおいしいぶどうを買って食べました。一粒食べた瞬間、「こんなおいしいもの、一人で食べていいんだろうか」と思いました。誰かにもこのおいしさを知ってほしい。「これ、食べてみて! 本当においしいから!」と差し出したくなったのです。福音も、どこかそれに似ているのかもしれない。私たちは、神さまのぶどう園へ、ただ自分だけが恵みを味わうために招かれているわけではありません。神さまからいただいた喜びを、「こんなに素晴らしいものがあるよ」と、まだ知らない誰かに差し出すために遣わされているのです。

今日の洗礼式は、一人の方が、イエスさまと共に歩む新しい道へ踏み出される時です。そして同時に、すでに洗礼を受けている私たちにとっても、自分がイエスさまに呼ばれた日のことを思い起こす時です。神さまからいただいた恵みの味を、もう一度かみしめてみましょう。そして、「これは本当においしいよ」と言いながら、その喜びを携えて、教会の門の外へ出かけていきましょう。私たち一人ひとりの「ラブソング」を歌いながら。

父と子と聖霊の御名によって。アーメン。